

西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

—緊急発掘調査報告—

宮の原B遺跡

1978

伊那市教育委員会

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

——緊急発掘調査報告——

宮の原B遺跡

1978

伊那市教育委員会

序

伊那市の南部地区西春近は、西側に権現山を主とする木曾山脈の連なりが広がり、山麓には北側は小黒川、戸沢川、小戸沢川、大田切川、猪の沢川、藤沢川、堂沢川等大小数多くの河川によって形成された河岸段丘や扇状地が発達している。このような変化に富んだ地形のためにいたるところに遺跡がみられる。

当西春近地区の西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）は昭和47年度より着手され、毎年、いくつもの遺跡が発掘調査され、記録保存という措置がとられてきました。

昭和52年11月より宮の原地籍の畑地帯総合土地改良事業が開始されることになり、この宮の原遺跡の緊急発掘調査を実施することになった。団長に友野良一先生、調査團に上伊那考古学会の先生方をお願いして調査團を編成し、発掘調査に着手しました。

今度の調査は、遺跡の一部分の発掘にとどまったが、平安時代の住居址1軒、土壙1基、江戸時代の墓壙1、暗渠排水1が検出された。これらの成果は、西春近の古代、中世・近世の時代的な流動について貴重な成果を上げることが出来ました。

ここに、調査報告書の発刊にあたって南信土地改良事務所をはじめ、長野県教育委員会、調査團の諸先生、作業員の皆様に心より謝意を表する次第であります。

昭和53年3月3日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

凡　　例

1. 今回の発掘調査は県営圃場整備に伴なう、土地改良事業で、第5次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国・県・市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事業所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和52年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美、田畑辰雄

◎図版作製者

○造構及び地形

友野良一、飯塚政美、田畑辰雄

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一、飯塚政美、田畑辰雄

○遺物

友野良一、飯塚政美、田畑辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 遺 構	(1 ~ 6)
第1節 住居址	(1)
第2節 墓 塚	(1 ~ 2)
第3節 土 壤	(2 ~ 3)
第4節 暗渠排水	(3)
第Ⅱ章 遺 物	(7)
第Ⅲ章 ま と め	(8)

挿図目次

第1図 第I区造構配置図	(1)
第2図 第III区造構配置図	(1)
第3図 第I号住居址・第1号墓塚実測図	(2)
第4図 第1号住居址カマド実測図	(3)
第5図 第2号墓塚実測図	(4)
第6図 第1号土塚実測図	(4)
第7図 塗堀排水実測図	(5~6)
第8図 茶臼実測図	(7)

図版目次

図版1 遺跡全景
図版2 造構
図版3 造構
図版4 造構
図版5 造構
図版6 遺物出土状況

第Ⅰ章 遺構

本発掘した場所を区にわけた。第Ⅰ区は深妙寺の東側の水田で、暗渠排水、第2号墓壙、第Ⅲ区は寺の南側で、第1号住居址、第1号土壙、第1号墓壙がそれぞれ発見されている。

第1節 住居址

第1号住居址（第3～4図、図版2）

第Ⅲ区の水田耕作面より40cm位下ったローム層面を掘り込んで構築された竪穴住居址である。平面プランは隅丸方形で、その規模は南北4m 95cm×東西4m 95cm程を測定できる。壁の状態はかたくて、凹凸は少なくわずかに外傾していた。

柱穴はきちんとしていないが、9カ所にあって、主柱穴が整っていない。床面の状態は中央がかたいが、ほかは軟弱である。カマドは東壁中央部にあって、石組粘土カマドであり、その保存状態は割合に良好であった。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、したがって、本址は平安時代の住居址と思われる。

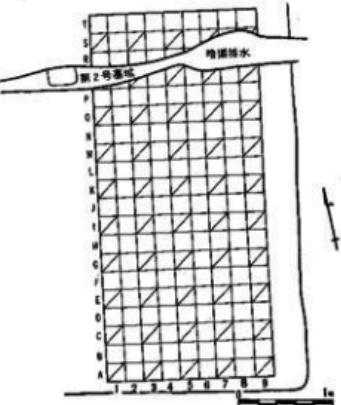
第2節 墓 壙

第1号墓壙（第3図、図版3）

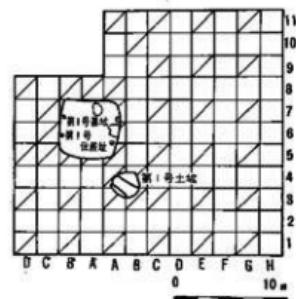
第1号住居址の北壁の近くに発見された墓壙である。第1号住居址の床面を掘り込んで構築しており、その規模は南北1m 10cm、東西85cm程を測定で、平面プランは長円形である。現況の壁高は浅くて、10数cmしかなかったが、構築当時は当然、もっと深かったものと思われる。

床面は大般水平で、かたいタタキになっていた。遺物は床面に密着してキセルと寛永通宝が出土した。寛永通宝は6枚一組に重なって出てきた。キセルも寛永通宝も青銅分が多いために、青く錆青が吹いていた。

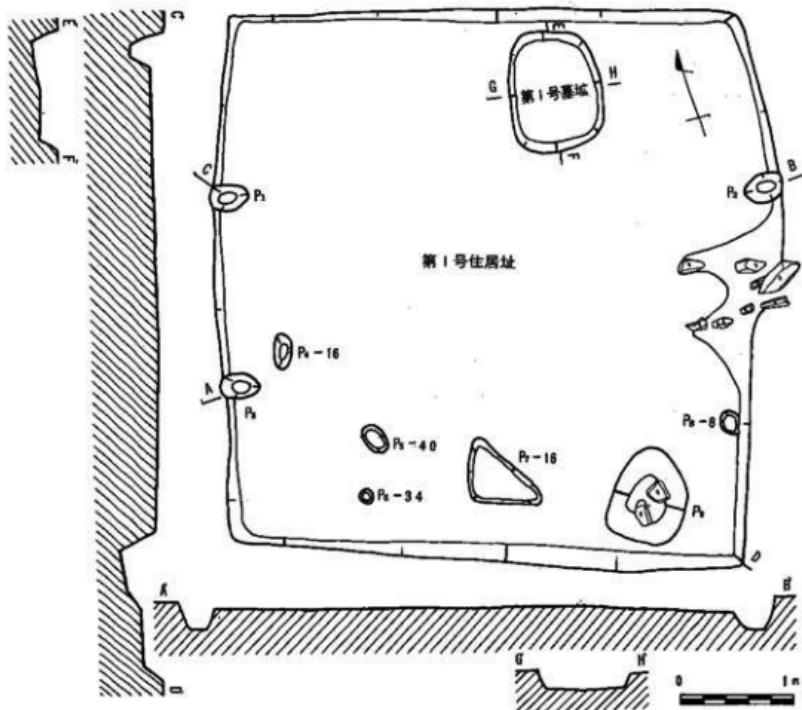
本墓壙は江戸時代のものと思われる。この事実は六文銭の風習を如実に実証できた。



第1図 第Ⅰ区遺構配置図



第2図 第Ⅲ区遺構配置図



第2図 第1号住居址・第1号墓塚実測図

第2号墓塚（第5図、図版5）

本土塚は暗渠排水の石を取り除いた下から発見された墓塚である。砂質混合の黄褐色土層を掘り込んで構築されており、その規模は南北1m65cm、東西2m80cm程度を測っている。その平面プランは隅丸方形を呈している。壁面は砂質混合の粘土をかたくつき固め、さらに、わずかに傾斜をもたせてある。その高さは北で55cm、南で70cm、西で65cm、東で50cm程度をそれぞれ測定できる。

床面は壁と同様に、若干の凹凸はあるが、かたく粘土でつきかためてある。覆土中より少量の骨片と宋銭の出土がみられた。覆土は黒色土の落ち込みが大部分であった。本墓塚は中世時代のものと推定できると思われる。

第3節 土 壤

第1号土壌（第6図、図版2）

本土壌は第1号住居址の南東の位置に検出され、ローム層を掘り込んで構築され、平面プランは円形状を呈している。土壌は中央部の高いところを境界にして南側と北側にそれぞれ凹み状になっていた。南側の規模は南北1m 10cm、東西2m 40cmであって、壁高は南側60cm、北側70cm、西側55cm、東側45cmをそれぞれ計ることができる。状態としては東側は内傾が強く、他の壁面は外傾が強かった。壁面全ては軟弱気味であった。

床面はわずかに起伏がみられ、軟弱であった。北側のは東西1m 70cm、南北50cm程の規模を有し、北壁は急斜面を、南側を垂直に成していた。壁面の状態は軟弱であった。

床面は一点に集中するような断面であったためにはっきりとしなかった。遺物は双方の穴から全く出土しなかった。

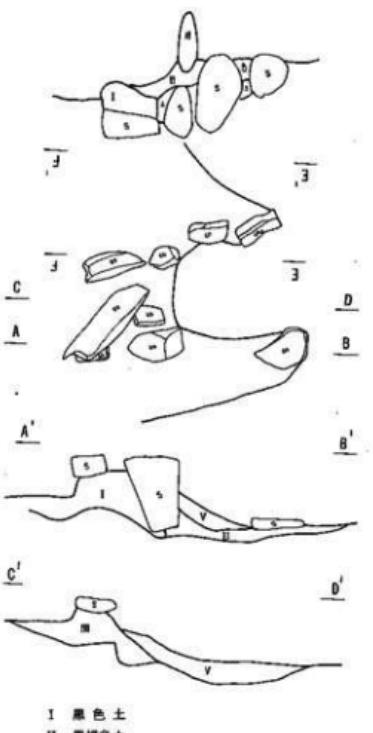
第4節 暗渠排水

第1号暗渠排水（第7図、図版4～5）

本暗渠排水は第I区の北側に、発見された構造で、表土面より40cm位下ったローム層面に入頭大からこぶし大程の大きさの石を不規則に無数配列してある。石の種類は安山岩、変成岩、花崗岩、粘板岩等さまざまであった。配列された規模は東西に約14m、南北に約1m 50cm～4mの範囲内であって、その石のレベルはわずかに高低はあるが、大般平坦であった。石はところどころで曲折しており、その附近では特に配列間隔が密であった。

石を取り除いてみると、下は川になっており、多量の砂が堆積していた。近くの古老に聞いてみるとこの暗渠排水は明治の終り頃につくられたそうである。

石の間からは石臼2個、その他多数の中・近世の陶器片、鉄器類が出土した。この遺物は暗渠排水を作る際、あるいは、あとからの流入の傾向が強いように思われる。（飯塚政美）



第4図 第1号住居址カマド実測図

I 黒色土

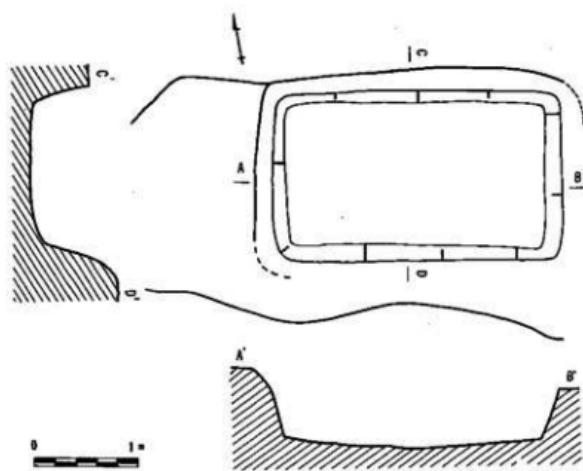
II 黒褐色土

III 鉛土混入+黒褐色土

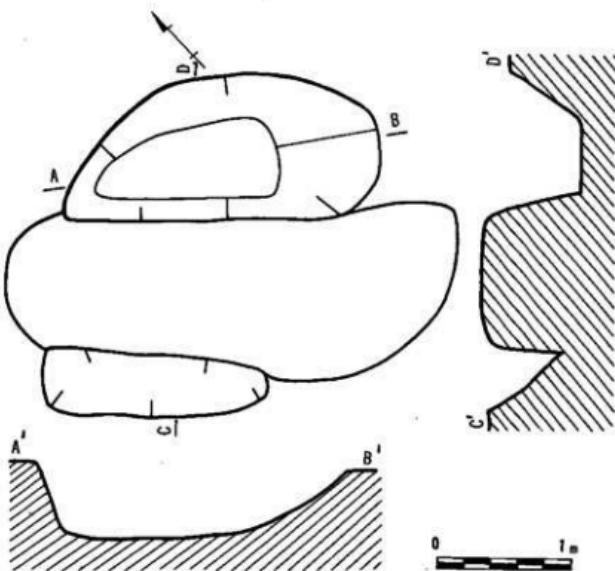
IV 灰黑色土

V 燃 土

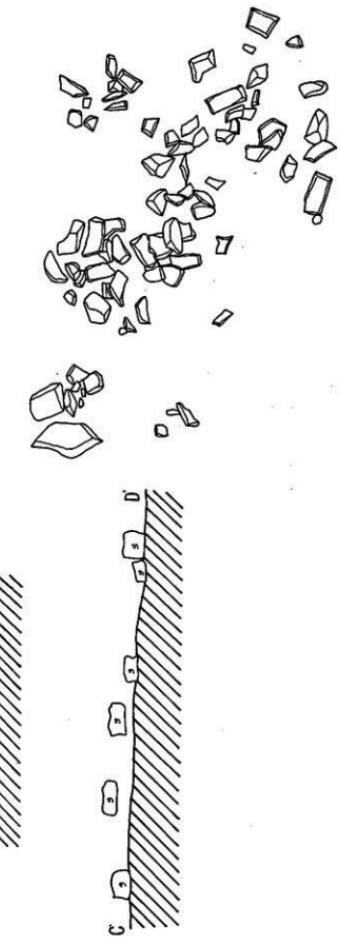
0 50cm



第5図 第2号基壙実測図



第6図 第1号土壙実測図



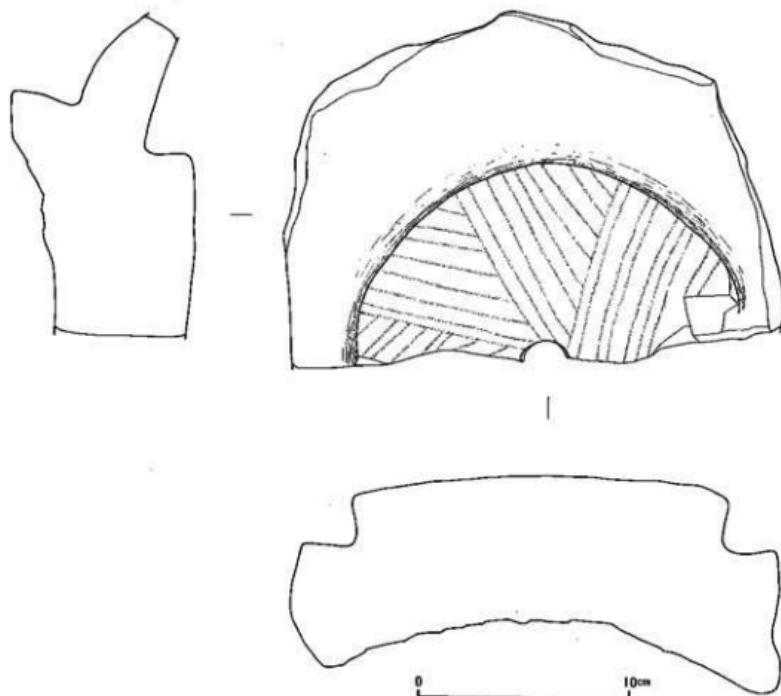
第7図 喷泥排水実測図

第II章 遺 物

遺物としては各種のものが出土したが、今回は割愛させていただいて後の機会に列記することにします。ここで主な遺物を記載してみると次のようなものがみられる。第1号住居址からは土師器須恵器、灰釉陶器片の出土、第1号墓塚からはキセル1、寛永通宝6枚、暗渠排水からは、内耳、天目、古瀬戸、中津川、黄瀬戸の中世陶器片と、近世陶器片、さらに鉄器類、石臼2個の出土をみた。第2号墓塚からは宋錢が1枚出土している。

第8図に記した茶臼は暗渠排水内より出土したものであって、半分は欠損しているが、見事な出来ばえをしたものである。石質は安山岩である。時代からして戦国時代あたりのものと考えられる。

(飯塚政美)



第8図 茶臼実測図

第III章 まとめ

宮の原遺跡は、今回の調査では、時間的な問題、あるいは予算等、各種の問題が重なってしまった、結果的には遺跡全体からみればわずかな地域だけの調査しかできなかったことは、誠に残念であった。当初の開田の際に破壊されたとみて、今回は平安時代の住居址1軒、中世時代の墓塚1基、近世時代の墓塚1基、時代不詳の土壙1基、暗渠排水1であったにすぎない。南側には小戸沢川が、北側には戸沢川が東西に流れ、それらにはさまれた台地上であるために、以前はかなりの集落が営まれていたと察知がつくところと思われる。平安時代の住居址は隅丸方形で、大きさ等の住居址に附随する諸条件は一般的にみられるのと大差類似していた。カマドは東壁中央部にあって石組粘土カマドであった。

第I区の第2号墓塚は壁面及び床面に第2次的に粘土を貼りつけてあり、その構築状態は中世墓塚を研究するうえには好資料となる。時代は宋銭の出土からして、一般的な時代区分で考えられている中世時代であろう。また骨片出土より墓と推測するのが妥当な線と思われる。第III区の第1号墓塚は寛永通宝の出土より江戸時代と決定づけられ、また、出土枚数より三途の川を渡る際に六文銭が必要であるという仏教思想が民衆のなかまで深く浸透していたということが裏付けできた。

暗渠排水は構築当時を知っている古老人に聞けば明治時代の構築物であることを証明してくれた。むしろ、この遺構内より出土した中世から近世に至る陶磁器類、鉄器類、石臼等の遺物の方が歴史的価値を評価すべきものと思われる。なぜ、このようなものが出土したかはすぐに西側にある深妙寺との関係が重要視されてくる。伊那市寺院誌より当寺の由緒を簡潔に述べてみると次のようになる。『開基は常法院日遊上人と伝えられている。

日遊上人は宗祖日蓮聖人の六老僧の一人といわれた日朗上人の愛弟子であった。上人は宗祖日蓮の法華経帰依の精神を地方に流布伝道する為に、各地を巡って布教に勤めたが、偶々信州伊那の地に行脚説法の折、この寺に立ち寄った。その頃（鎌倉時代後期）この寺は西春近の山寺垣外にあり、真言密教を宗旨としていたが当時のことは詳かでない。

（山寺垣外はこの寺の所有地で約三町歩余もあり明治初年頃は山林であったが水田の痕跡もあり、老松もあり、塚もあった。現在は果樹園になっている。

日遊はこの寺に足を留めて、法華経の精神、即ち宗祖日蓮の教義を唱道し、日蓮宗を以って自ら開山となった。

その後、慶年年間（1591—1614）に火災に遭い堂塔伽藍すべて鳥有に帰したため、現在の中村の地に移り再建した、しかし以後百五十余年を経て宝曆十三年（1763）また火災を起し堂塔を失ったが寺檀の苦心によって即ち復した。明治の初年ころ廃仏毀釈の影響と信徒自由の主張によって近くに新寺が建立され、檀徒、信徒に動搖がおこり分離が行なわれるに至った。

この寺には古くから各村々、部落毎に法華講が行なわれるに至った。

昭和31年（1956）2月9日又火災に見舞われて茅葺の本堂、庫裡を全焼し七面堂も半焼した。しかしその翌年本堂は再建され、つづいて庫裡も建立され、七面堂は残った部分を生かして修理が行なわれた。かくて開山以来36世、6百余年を経て現在は日典和尚の世代である。

（飯塚政美）

図 版



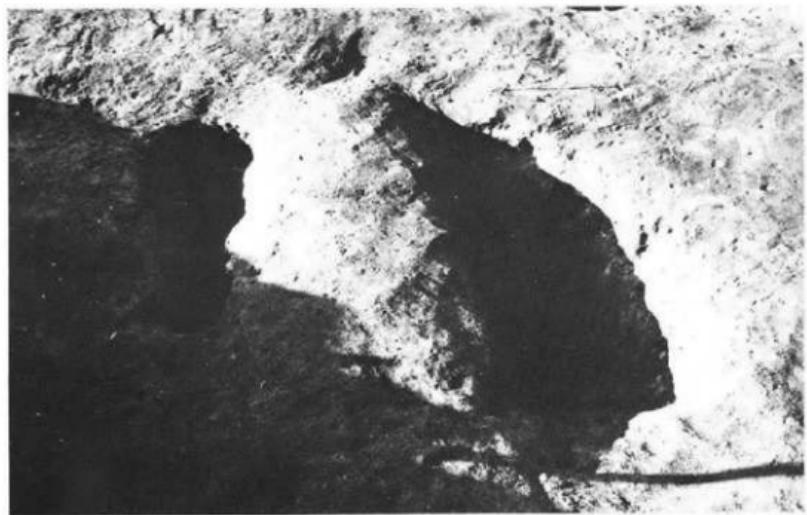
遺跡地を南西より眺む



遺跡地を西侧より眺む



第1号住居址



第1号土壤



第1号墓塚



第1号住居址カマド



暗渠排水



暗渠排水



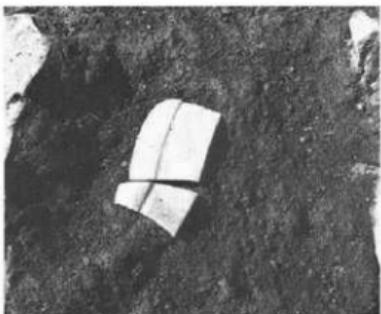
堵渠 排水断面



第2号墓墳



キセル・古錢出土状況（第1号墓壙）



陶器出土状況（暗渠排水）



陶器出土状況（暗渠排水）



内耳土器出土状況（暗渠排水）



石臼出土状況（暗渠排水）



鉄器出土状況（暗渠排水）

宮の原日遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和53年3月15日 印刷

昭和53年3月20日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町

印刷所 梶オノウエ印刷

